

“General History” By Phillip Van Ness Myers 読後雑考

福岡潤治

はじめに

嘗ては名著と言われた書籍もその著者が他界してしまうと、顧みられなくなることがある。特に移り変りの激しい事象を取り扱う分野の学問においては然りである。Phillip Van Ness Myers の数々の著書もその部類にはいるのではなかろうか。Myers は1846年New York に生れ、1937年に他界した歴史学者である。彼は最初 Lawを学んだが後に歴史を勉強し、Ohio 農科大学長を勤め（1879～90）、1890年以降は Cincinnati 大学で歴史及び政治経済の教授を勤めた。著書には Ancient History 1882, Medieval and Modern History 1889, General History 1889, Eastern Nations and Greece 1897, Rome, Its Rise and Fall 1900, The Middle Ages 1902, The Modern Age 1903, History as Past Ethics 1913等がある。これ等著書から見る限り、彼は 西洋史の中でも古代史、特にギリシア、ローマの研究家であった様に思える。西洋史の専門家でもないのに私が敢てGeneral History を取り上げて読破できたのは、その内容の含蓄の深さもさることながら、その英文の表現力のすばらしさに魅せられたからでもある。取り上げたテーマも西洋史の専攻者から見れば極く常識的なものであり、特殊なものではないが、素人の私が私なりに考えたり感じたりしたことを雑駁に並べただけで、当に標題の通り読後雑考であることをおことわりしておきたい。Myers は法律を学び政治経済の講座も受け持っていただけに、その歴史の論述も歴史の背後にある政治経済を鋭く追求しているのは特筆すべき点であろう。又歴史上の人物の個人評は卓越しており、各人

物の吐露した文言を dramatic に織りこんでいるのも印象的である。私の読破した General History は彼が Cincinnati 大学の歴史学の Honorary Lecturer の時代の著作の Second Revised Edition であるから、彼の晩年の著作であろう。727頁の分厚い書物で古代から第一次世界大戦終了後の Versailles Peace Conference で終わっているのに、第二次世界大戦の勃発過程や戦後今日にいたる世界の現状についての記述は勿論あるはずはない。それでも一読に価する素晴らしい名著であることを改めて再認識した次第である。

1 The Athenian democracy and women

Democracy はギリシャ語の Demokratie に由来し、人民を意味する Demos と支配政治を意味する Kratia という語の結合からなっており、本来は「人民の政治」という意味である。そして19、20世紀を支配する政治用語になり、人民による政治、多数による政治を意味することになったが、その起源はギリシャに見られる都市国家の自由参政権に由来する。中でもアテネはその典型的なものであった。しかし勿論今日の民主制とは著しく異なり18才以上の男性市民に参政権が限定され、女性、在留外人、奴隷は政治から除外されていたから、全人口の中13.6%位が政治に関与しただけである。紀元前443年～429年の Pericles 時代が最も民主制の徹底した時代であり、ポリスの民主政治によって養われた自由と公共の精神は大きな文化遺産となり、後のヨーロッパ思想に大きな感化を与えた。しかし当時の婦人の地位はどうであったか。「よきにつけ悪しきにつけ男の噂にのぼらない婦人が Best なのである」というその時代の諺が示す様に、婦人は公衆の面前には滅多に出ず自分の家においてさへ夫の男友達に会うことも許されなかった。又演劇も悲劇は見ることを許されたが comic は見られなかったという。男性から妻に宛てた手紙を夫は自由に見る事ができ、場合によってはそれを根據に訴訟すらできたのに婦人にはそれができなかった。男女同権の思想はヨーロッパの方が東洋よりも数段先んじている様に我々は兎角考え勝ちであるが、決して欧米諸国ですら男女同権の思想はそんなに甘くは

なかったのである。

Although there are in Greek literature some exquisitely beautiful portraiture of ideal womanhood, still the general tone of the literature betrays a deep contempt for woman. Thucydides quotes with seeming approval the Greek proverb, "That woman is best who is least spoken of among men, whether for good or for evil."

This unworthy conception of woman of course consigned her to a narrow and inferior place in the Greek home. Her position may be defined as being about halfway between oriental seclusion and modern or Western freedom. Her main duties were to cook and spin, and to oversee the domestic slaves, of whom she herself was practically one. In the fashionable society of Ionian cities she was seldom allowed to appear in public, or to meet, even in her own house, the male friends of her husband. (P143)

又 観劇については次の如く記す。

Theatrical performances, being religious acts, were presented only during religious festivals, — certain festivals observed in honor of Dionysus, — and were attended by all classes, rich and poor, men, women, and children.

The women, however, were, it would seem, permitted to witness tragedies only; the comic stage was too gross to allow of their presence. (P143)

〔注〕 英文下の横線は筆者による。以下同じ

ついでに上述の趣旨を端的にあらわしたものとしてペリクレスの戦没戦士葬送演説の一部に次の言葉がある。この演説は格調高い民主主義の演説としてリンカーンのゲテイスバーグ演説と並ぶものであるが、未亡人への戒めは古代民主政下の婦人の閉ざされた社会的地位を物語っている。

「……またこのたび寡婦となられたかたがたの婦徳について、私から何か申し上げねばならないなら、短い忠告で示そう。すなわちあなたがたにとり大きな誉れは、女としての本性に劣らぬ人々や、また褒貶いづれについても男どもの噂にのぼることが最も少ない人にあると。……」

2. Carthage should be destroyed.

カルタゴは今日の北アフリカ、Tunisia 共和国の首都Tunis の北方にあたる地域である。もとフェニキヤの植民地であったが、紀元前300年頃より地中海貿易で大なる富力を蓄積し、自然の勢として当時地中海を距てたローマと対峙するに至った。富の点に於てはローマに勝っていたが、政治的才能に於てはローマ人に劣り、数名の富豪よりなる貴族的寡頭政治の下にあって平民は重税に圧迫され、傭兵制度の為団結力に欠けていた。BC264からBC146に亘る約118年3回に亘るPunic War によってカルタゴはローマに滅されるのである。ローマは他の征服地に対し自治を認め寛大な処置をとったことがローマ拡大の原因であるのだが、カルタゴに対しては、実に徹底的殲滅を試みた。蓋しそれは両者の経済的反目がいかに深刻であったかを物語るものである。第一回のPunic War におけるカルタゴ敗北による10ヶ年賦3200タレントという多額の賠償金支払い、第二回のPunic War におけるHannibal の復讐戦もカルタゴ本国内の平和希望者の為支援続かず屈辱的和平条件を受けざるを得なかった。しかし貿易国カルタゴは努力して漸次繁栄を来した。ローマ元老院議員Marcus Catoはその繁栄振りを見て驚いた様子をMyers は次の如く描写する。

When he (Cato) saw the prosperity of Carthage, — her immense trade, which crowded her harbor with ships, and the country for miles back of the city a beautiful landscape of gardens and villas, — he was amazed at the grown power and wealth of the city, and returned home convinced that the safety of Rome demanded the destruction of her rival. All of his addresses after this — no matter on what subject — he is said invariably to have closed with

the declaration, "Moreover, Carthage should be destroyed. " (P179)

ローマの資本家達はカルタゴが葡萄酒とオリーブ油との供給によってイタリア本土の農業を妨害することを最もおそれた。ローマはカルタゴの隣国たる Numidia を使喚して頻りにカルタゴを侵略せしめた。カルタゴは何度もその不都合を訴えたが聴き容れられず、已むなく Numidia に対して戦わざるを得なかった。「カルタゴはローマの許可なくして他国と戦ってはならない」という第二 Punic War の講和条件違反を口実としてカルタゴを難詰した。そしてカルタゴはその港湾をローマに委ね、海岸を去る10哩の地点に移住することを要求した。しかし商業貿易を生命としているカルタゴにとってはそれは正に生命を絶たれるも同然であった。ローマの要求を拒絶したカルタゴはあらゆる犠牲を払って新に武器を製造し寺院は工場と化し婦女は毛髪を切って弓絃となし、カルタゴの城壁によってローマの攻撃に耐えること4年、遂に矢盡き刀折れてローマの將軍スキピオの為に滅されてしまった。

A pretext for destroying the city was not long wanting. Charging the Carthagians with having broken the conditions of the last treaty, — they had broken the mere letter of it, — the Romans laid siege to Carthage. For four years the city held out against the Roman army. At length the counsel Scipio succeeded in taking it by storm. The city was literally erased. Every trace of building which fire could not destroyed was leveled, a plough was driven over the site, and a dreadful curse invoked upon anyone who should dare attempt to rebuild the city (P179)

勇將Scipio はカルタゴが滅亡の炎の中にあるのを見て「アッシリアはすでに滅び、ペルシア、マケドニアも滅びた。そして今やカルタゴは炎の裡にある。次に来らんものはローマか」と長嘆し、涙を流しながら、「イリアッド」のトロヤ炎上の部分を誦したといわれる。

Polybius, who was an eyewitness of the destruction of the city,

records that Scipio, as he gazed upon the smoldering ruins, seemed to read in them the fate of Rome, and, bursting into tears, sadly repeated the lines of Homer :

The day shall be when holy Troy shall fall

And Priam, lord of spears, and Priam's folk (P179)

かくしてカルタゴは火焰と共に滅亡し、ローマの覇権は成ったのである。しかしカルタゴ滅亡後600年位に至って、ローマも周辺の蛮族に侵略される浮目にあう。昔カルタゴとして栄えた土地も紀元455年Vandalという海賊が襲うことになり、Scipioが奇しくも予言したことが実現する破目に陥る。

The ships of the Vandals, which almost hid with their number the waters of the Tiber, were piled, as had been the wagons of the Goths before them, with the rich and weighty spoils of the capital.
中略

The Vandal fleet sailed for Carthage, bearing, besides the plunder of the city, more than thirty thousand of the inhabitants as slaves. Carthage, through her own barbarian conquerors, was at last avenged upon her hated rival. The mournful presentiment of Scipio had been fulfilled. The cruel fate of Carthage might have been read again in the pillaged city that the Vandals left behind them.

(P230~23)

後世ナポレオンは大陸に於ては嚇々たる戦果を収めたが、どうしても歯がたたなかったのは卓越したイギリスの海軍力であった。イギリスは海軍力と共に17世紀以来国内に勃興した産業革命の結果と広大な植民地との貿易によって蓄積された巨大な富を有していた。その為ナポレオンは折角スペインから得たアメリカの植民地Louisianaを1803年に1500万\$で売却して英国討伐の準備をととのえるのである。そしてCarthage must be destroyedと英国をカルタゴに見立ててローマ気取りのフランスがこれを何とかして征服しようとした。だ

がこのカルタゴはあべこべにローマをトラファルガルの海戦やウオーターローの陸戦で撃破することになったのであるが。

As early as 1803 Napoleon had began to mass a great army at Boulogne, on the English Channel, and to build an immense number of flat-bottomed boats preparatory to an invasion of England. "Carthage must be destroyed", was the menacing and persistent cry of the French press. "Master of the Channel for six hours," said Napoleon, "and we are masters of the world." To arouse patriotic enthusiasm by historic memories, he caused the Bayeux Tapestry, the famous memorial of the Norman conquest of England, to be brought to Paris. (P548).

さて現今我が国日本はCarthageにならねばよいがと思う。戦後の奇蹟によって日本は米国を凌駕する経済大国になった。ついこの間までは米国から手取り足取り色々な技術を学び経済的援助も受けてきた。両國に大きな差がある間は jealousy も rival 意識も起こらないが、完全に対等若しくは日本が米国よりも優位に立つと事情は違ってくる。日米の経済摩擦という両国間の trouble が起こり始めた。又日本の発展途上国に対する経済援助も smooth ではない。米国が嘗て随分後進国に経済援助をしたにもかかわらず、相手国は必ずしも有難く思わなかったがそれ以上に日本に対する発展途上国の態度は好意的であるとはいき切れない。その原因は種々複雑な事情が絡んでいることも間違いないが、経済は一流であっても政治は二流、三流である日本は丁度約2,000年前の Carthage に類似している所はないか。カルタゴは貿易により経済的繁栄によってギリシャ・ローマの反発を買ったのみならず周辺のすべての民族を敵にしまったことに滅亡の原因があった。私は過去の歴史を安易に現代のそれと結びつけるつもりはないが、カルタゴの歴史からなにがしかの教訓を汲みとるべきではなからうかと思う。

3. When the cat's away, the mice will play.

1339年から1453年にかけて英仏間には王位継承問題や経済的な利害が絡み、所謂百年戦争が勃発。1337年英王が挑戦し1338年英軍が仏領に上陸、1339年開戦、戦場はすべて大陸、英軍に大砲が登場した。休戦が多く時折り決戦が行われたに過ぎなかった。両軍とも傭兵が多く使用され、一隊の私兵を率いる貴族が国王と契約を結び、一括して給料を受け取っていたが、休戦により無給となると傭兵たちは隊長を中心に野盗の群に転化して農村を荒した。この様な悪い背景の下には更に悪い事が起るもので1347～1349年の間に亘りペストである Black Deathが欧州全体を席卷した。

At just this time there fell upon Europe the awful pestilence known as the Black Death. The plague was introduced from the East by way of the trade routes of the Mediterranean, and from the Southern countries spread in the course of a few years over the entire continent, its virulence without doubt being greatly increased by the unsanitary condition of the crowded towns and the wretched mode of living of the poorer classes. In not a few regions almost all the people fell victims to the scourge. Many monasteries were almost emptied. In the Mediterranean and the Baltic, ships were seen drifting about without a soul on board. Crops rotted unharvested in the fields; herds and flocks wandered about unattended. It is estimated that from one third to one half of the population of Europe perished. Hecker, a historian of the pestilence, estimates the total number of victims at twenty-five millions. It was the most awful calamity that ever befell the human race. (P346)

扱ってここでペスト流行の原因としてMyersが述べる如く、戦争や略奪で荒廃した都市、農村の非衛生的背景にこそその主因があるものと思うが、ここに

興味深い説をたてる考え方がある。そもそもベストのcarrierはねずみであるといわれるが、この頃Europeには猫がほとんどいなくなっていたのである。その理由は何か。元来猫はエジプト時代は穀倉をねずみの被害から守る動物として、Passhetという女体の頭だけが猫という神様が信仰されていたのである。然るに中世にはいるとキリスト教徒達は、猫はキリスト教以前の宗教に係る動物、つまり異教徒の大切にされた動物であることの反動としてヨーロッパ中で生きたまま焚殺される憂目にあう。まさに怨念の強いといわれる猫が、その怨みからBlack Deathを流行せしめたとは思いたくないが、ベストを運んで来たねずみの大群がヨーロッパに来た時は猫は絶滅していたらしい。その間の事情をKenneth Kedrick & Brian PowleのCross-Cultural Fantasia (P25)には次の如く記されている。

The Golden age for the cat came to an end in the Middle Ages. The Christian church began to persecute the cat because of its connection with pre-Christian religions. The cat was now accused of being connected with witchcraft and the devil. Thousands of cats were burned alive in cat-burning ceremonies throughout Europe, to the hysterical cries of fanatical Christians. They believed that killing the cats freed them from the devil's influence. After years of persecution by the church, the cat became virtually extinct in Europe, just at the time when they were needed most. Europe was being invaded by hords of plague-carring rats from Asia. As the saying goes, "When the cats away, the mice will play." The rats not only played, they also killed two thirds of the population of Europe with the Black Death.

4 Virgine Queen Elizabeth (1558~1603)

1952年(昭和27年) 英国王George VI (1936~1952) の逝去後女王 Elizabeth

IIが誕生した。イギリスは世界的大帝国の遺産を動員して第一次大戦には勝ったが、莫大な消耗により国力は衰えた。1922年アイルランドは自由国となり、インドには反英独立運動が激化し、中央集権的大英帝国は1931年英連邦に編成された。満6年にわたる第二次大戦でも国力を使い果して勝ちぬいたが、海外領土は次々に独立、経済は困窮する一方であった時代に即位した英女王は、嘗て内外に数々の功績をあげ、その後の英国発展の基礎を固めた女王Elizabeth Iにあやかる為、Elizabeth IIと称したのであった。果して今日の英国はその欲する願望に近づいたかどうか。それは別としてQueen Elizabeth Iの45年間の治世は、内外共に政治よろしくその後の英国大飛躍の基礎をきずいたことは確かである。特にスペインのInvincible Armadaを撃破し、北に一小島国を世界の英国にした上、海外における多数の植民地の獲得、新教を信奉する女王がCatholicismに対してもこれを抑制する充分な権威を確立したのであった。MyersもShe raised the nation (England) from a position of comparative insignificance to a foremost place among the states of Europe (P420)という様にその治世の発展飛躍を評価しているが、その個人的性格については鋭い酷評を下している。即ち

Along with her good and queenly qualities she had many unamiable traits. She was capricious, treacherous, and unscrupulous. Deception, and falsehood were her usual weapons in diplomacy. (P420) とこきおろしている。

そもそもElizabethはHenry V IIIと宮廷に仕える一女官であったBoleynとの間にできた子供である。Henry V IIIは兄の未亡人Catherine of Aragonとやむなく結婚したが、生まれた子供が次から次へと死亡することも手伝って彼女を離婚する為にその承認を法王に求めた。勿論それが許される筈がない。従って彼は旧教を捨てて新教徒となり、愛人Boleynと結婚したのである。この兩人ともそれぞれ人一倍個性強い人物であったせいかMyersはShe(Elizabeth) seems to have inherited the characteristics of both parents ; hence, perhaps, the

inconsistencies of her disposition. (P420) と述べている。彼女の治世中は従姉妹Queen of ScotsのMary Stuartとの関 連を除いては語り得ないのであるが、“Modern Helen”と称せられた程の絶世の美人であるMaryが熱心な旧教徒であったのを理由として19年間も牢獄に押しこめ遂に彼女をElizabeth自身の王位をねらう反逆者として処刑してしまうのである。だがElizabethは最後まで自分がMaryを殺したことにしたくないので、種々の術策を弄する。そのことをMyers は

Mary was tried for complicity in the plot, was declared guilty, and, after some hesitation, feigned or otherwise, on the part of Elizabeth, was ordered to the block. Even after Elizabeth had signed the warrant for her execution she attempted to evade responsibility in the matter by causing a suggestion to be made to Mary's jailers that they should kill her secretly (P423~424).

Elizabethは俗に言う降る様な縁談を断って生涯独身で通した。

Elizabeth never married, notwithstanding Parliament was constantly urging her to do so, and suitors, among whom was Phillip II of Spain, were as numerous as those who sought the hand of Penelope. She declared — very late in her reign, however — that on her coronation day she was married to the English realm, and that she would have no other husband. She remained to the end the “fair Vestal throned by the West.” (P421)

彼女の治世中数度の海外へのexpeditionが試みられ、Sir Walter Raleigh (1552? - 1618) の企画は特筆される。そして北アメリカの中央海岸遠征の時 in honor of the virgin queenによりその土地がVirginiaと名付けられたことは有名である。しかし晩年の彼女はどうかであったか。絶えず良心の呵責に悩まされたのではないか。

The closing days of Elizabeth's reign were to her personally dark

and gloomy. She seemed to be burdened with a secret grief as well as by the growing infirmities of age. She died in the seventieth year of her age and the forty-fifth of her reign. With her ended the Tudor line of English sovereigns. (P426)

5. Divine Right of King

「豊葦原とよあしはらの千五百秋ちいほあきの瑞穂みずほの国は是れ吾が子うみのこの君たるべき地なり。爾皇孫なんじ就ゆいて治めよ。宝祚あめつちのさかえまさんこと天壤きやまと共に窮り無かるべし」

これは私共old boysが戦前日本史や修身の教科書の冒頭に記載されていた上記文言を暗記させられ、益々国に忠であるべきことを教えられたものである。これは古事記や日本書記の天孫降臨の所に記載されている有名な神勅で、戦前の日本の天皇の神格化を決定する根拠となっていたものである。これを受けて大日本帝国憲法（明治憲法）は

第一条に 大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス

第三条に 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス と規定した。

上述は明らかに国王や君主の権力が神に由来すると説明するDivine Right of Kingの説に外ならない。この説はEmpireとかRoman Seeに代る国家の君主や王達が、17, 8世紀に称えたところにその特徴がある。そしてこの説はやがてDemocracyに取って代わられるのであるが、第一次大戦中のドイツや第二次大戦中の日本の如く、封建性の強い国或いは後進国程長くこの説を保持していたといえるだろう。もっとも古代エジプトに於てはPharaohはdivine natureを有し、古代Judeaに於ても王はthe Lord's Anointedで、地上では神のvicegerentであった。中世になってローマ法皇はその權威をdivine rightに求めていたと言える。しかし法皇と皇帝や王達が争い始め、やがてローマ法皇の權威を王達が篡奪した時、彼等はroyal authorityのdivine natureを説きはじめるのである。そしてこの説が丁度国家の始まりというべき専制君主の好個のtheoryとして受け入れられることになる。フランスLouis14世のcourt chaplainで

であったBossuet (1627~1704) は説く

Kings are the ministers of God and his vicegerent on the earth.
The throne of a king is not the throne of a man, but the throne
of God himself. …… The person of kings is sacred, and it is sacrilege
to harm them. They are gods, and partake in some fashion of the
divine independence. (P449~50)

しかし王権神授説が如何に王と国民との間に多大の犠牲を生ぜしめたか、又国民は革命という理論を奉じて自分達こそ統治すべき真のdivine and inalienable rightを所有するものであるかをdemonstrateするに至るとMyersは説いている。要するに近世初期即ち17世紀頃の国家は君主中心の専制国家である。専制の語は現代人にとっては何わしいものであるが、それは多年社会に根を蔓らせていた中世以来の封建的傾向を打破せんための必要な過程でもあった。けだし民権の未だ充分に発達しなかった当時においては、君主の強大なる手腕によって国家の権力が集中され、その力によって国民の利益を増進することが文化発展上当然な手段であったのである。

我が国の明治維新に際しても、もしあの当時今日の様な日本国憲法を作成しても国民全体には受け入れられなかったであろう。けだし当時の日本国民は憲法発布の事を「天子様が絹の法被^{はっぴ}(憲法発布)を下さるのだそうだ」という程度の幼稚な考え方しかもっていなかったからである。新憲法から見れば明治憲法は議会の力を極力抑制しようとした極めて非民主的なものではあるけれど、当時としては兎に角一応近代国家の体裁を緊急に整えなければならなかっただけに、あの様な形式、内容を取らざるを得なかったことは已むを得ないところであったと思われる。

ところで王権神授説の信奉者の代表は何といってもフランスのLouis14世である。

L'É tat, c'est moi (I am the State) と彼が本当に言ったかどうかは学者の間で疑問視されているのだが、

In his own view he was by divine commission the sole legislator, judge, and executive of the French nation. (P453)

とMyersの表現が端的にこれを示す。イギリスにおいてはJames 1世(位1603~25)が1610年やはり議会に対してDivine Right of Kingの演説を行なったことは有名である。しかしイギリスでは元来王権神授説的な考え方の伝統は弱く、ためにこれをふりかざしたStuart王朝の王に対して反感が強まり遂に清教徒革命がおこった。フランス、イギリスでは夫々革命によって王権神授説は完全に払拭された。然るにドイツは19世紀になって漸く国家としての頭角をあらわしてきた。それはblood and ironの政策を奉ずるBismarckの経綸に負うところが大きい。しかし不幸にしてHohenzollerns家の三代目若きEmperor William IIはBismarckと意見が合はずこれを罷免した。そしてドイツ諸王侯にあてて打った電文に曰く「国家という船の当直将校の役を朕が担当することになった。航路は従来どおり全速で航行せよ」と。しかし航路は従来とは大いに異なり、ドイツ外交は世界政策へと進んでゆくのである。そして彼は次の如く述べた。

I alone am master here ; who opposes me I shall crush (a sentiment expressed by the young Emperor at the time he “dropped his pilot,” Prince Bismarck). “We Hohenzollerns take our crown from God alone, and to God alone we are responsible in the fulfillment of duty.” “The spirit of the Lord has descended upon me because I am the Emperor of the Germans. I am the instrument of the Almighty, his sword, his agent. Woe and death to all those who oppose my will.” (P661) と。

そしてMyersは上述の言葉に対して次の如く論評を加える。

Now, this is exactly the language of the divine-right Stuarts of England and the pre-revolutionary Bourbons of France, whose arrogant assumptions and unbearable tyranny did so much to provoke

the English and the French Revolution. The ideal of government, the mode of thinking, shown by these declarations was one of the deeper causes of the World War (第一次世界大戦) — for civilization cannot exist half autocratic and half democratic — and was what made it possible for President Wilson, when, in the third year of the unprecedented conflict, the United States entered the war, to define it as fundamentally a struggle between democracy and autocracy and to declare our aim and purpose in entering the war to be “to make the world safe for democracy.” (p662)

William II はドイツ民族が世界を支配する優秀民族とうぬぼれ、世界を征服するのはドイツ民族と考えたのは、丁度第二次世界大戦当時の日本が大和民族こそ世界を支配する卓越した民族で八紘一宇をとらえて侵略戦争を惹起したのとよく類似しているではないか。日本は終戦前においても約30年も遅れていたというべきか。

6. After us the Deluge

1789年7月4日Bastille のStormingを契機としてフランス革命が始り、幾多の紆余曲折を経て1793年1月Louis16世、同年10月皇妃Marie Antoinetteが guillotine によって処刑される惨劇が訪れるのである。しかしLouis16世夫妻はむしろBourbon王朝累代の積弊が一挙に爆発したその犠牲者というべきである。Louis14世は先述した様に王権神授説を奉ずる専制君主であった。財政の濫費、たとえばかの有名なVersailles宮殿の如きはLouis14世の権勢とそれによる豪奢を語る記念物であろう。その上屢々無謀な大戦争を起し、財政の能吏コルベール等の努力によって充実した国庫を窮乏せしめていた。この経済的困窮の禍根を改めるには、Louis15世、16世共に荷が重すぎたのである。Louis14世の晩年は可成悲惨なものであった。王は太子と二人の孫とを病気のために失い、継承者としてはただ5才の玄孫（後のLouis15世）が在るのみである。この様

に後継者の相次ぐ病死はBurbon王朝の末路を暗示する出来事であったかもしれない。Louis15世は7年戦争を起し、Louis16世はイギリスとの対抗意識からアメリカ独立戦争を応援し多大の国庫出費をした。実にフランス革命の原因は、この7年戦争とアメリカ独立戦争応援の結果に胚胎するともいわれる。その上Louis15世は寵姫としてMadame de Pompadourの多大の影響下にあった。彼女は其の美貌によってLouis15世を20年間にわたって完全に虜にして大臣の任命すら口に出した。彼女は軍需商人の娘、もとは徴税請負人の妻であった。フランス宮廷は財政的窮乏をよそにして相不變贅沢三昧の生活を続けていた。勿論宮廷内は寵姫がすべてPompadour夫人の如きものではなく、官吏もすべてが弊臣ではなかった。しかし寵臣の多くが内外の政治を左右し、Louis15世も鞏固な意志は全くなく、政治はただLouis14世以前の旧制度を維持することに止まり、改革を断行する気力に乏しかった。Burbon王朝滅亡の蹻音は既にLouis15世の時代から次第に高くなっていたのである。そして宮廷内にも充分これが認められていたものと見えて、なげやりのな句 After us the Deluge（後は野となれ山となれ）が公然と言われていた。Myersはその状況を実にすばらしい表現で次の様に述べている。

The long-gathering tempest is now ready to break over France. LouisXV died in 1774. In the early part of his reign his subjects had affectionately called him "the Well-Beloved," but long before his death all their early love and admiration had been turned into hatred and contempt. Besides being despotically inclined, the king was indolent and scandalously profligate. During twenty years of his reign he was wholly under the influence of the notorious Madame de Pompadour.

The inevitable issue of this orgy of folly and extravagance seems to have been clearly enough perceived by the chief actors in it, as is shown by that reckless phrase attributed to the king and his

favorite, – “After us the deluge.” And after them the deluge indeed did come. The near thunders of the approaching tempest could already be heard when Louis XV lay down to die. (P517)

財政の窮乏を示すものとして1789年のフランスの国債45億リーブルの利子3億リーブルが歳入の半分以上を占め、王室費、貴族の年金がこれに拍車をかけた。貴族、僧侶は租税負担が軽く概ね平民階級の負担となり、フランス全土の4割を所有する彼等は直接税の8割を負担し、農民の負担額はその収穫の5割以上に当たったといわれる。しかも徴収した税金の6割がVersaillesの生活に費消されていたというのであるから、特権階級が一般人民の怨府となったのも怪しむに足らない。当時のフランス農民が諸外国の農民に比して生活水準が低かったというのではなく、むしろ高い位であったのが、その割当てが不公平で特権階級のみが安逸をむさぼっていたことに農民や一般市民の不満が爆発したのだと言い得る。

7. Execution of Kings

「天子と雖も徳を失えばその地位を失う」とは太平記の有名な言葉である。第二次世界大戦中、「天皇は絶対神聖で侵すべからざる存在である」と固く信じてやまなかった右翼思想家の気に入らぬ文言でもあった。太平記は後醍醐天皇の建武の中興の失政をそれとなく表現したつもりであったのだが、終戦後までは、皇国史観の歴史学者から全面的信頼を勝ち得る書物ではなかった。しかし今日では太平記の述べるとおりのものであると私は思う。もっとも幸なことに日本では天皇を流罪にすることはあっても命まで奪うことはなかった。幸い歴史上日本の天皇は国民全体に怨まれる様な存在であったことは無かったし、幸か不幸かその生活振りも例外はあるが外国君主の様に専制的で贅沢な生活をするchanceに恵まれなかったことにもあると思う。しかし西洋の歴史においては、国民による国王に対する公然たる処刑は三件もあった。1つは英国のCharles I, 2つめはフランスのLouis16世, 3つめはロシアのNicholas IIの処

刑である。

(1) Charles 1 世の処刑

1603年Elizabeth 女王の死によってTudor 王朝が断絶、Scotland王が王位を継承しJames I となりStuart王朝を開く。次のCharles I はDivine Right of Kingを信奉し議会を無視する専制的態度に出た。ここで議会と国王が屢々衝突し、議会在国王の専制に抗して1628年有名なPetition of Rightsを提出するに至る。それにもかかわらずCharles I の専制政治は甚しく、遂にCromwellのPuritan Revolutionがおこり、1649年 議会は王を斧で斬首するという惨刑を科し共和国を宣言した。処刑に当っての王の最後の言葉は印象的である。

The Commons thus “purged ” of the king’s friend now passed a resolution for the immediate trial of Charles for treason. A High Court of Justice, comprising one hundred and thirty-five members, was organized, before which Charles was summoned. Appearing before the court, he denied its authority to try him, consistently maintaining that no earthly tribunal could rightly question his acts. But the trial went on, and before the close of a week he was condemned to be executed “as a tyrant, traitor, murderer, and public enemy to the good people of this nation. ”

In a few days the sentence was carried out. Charles bore himself in the presence of death with great composure and dignity. On the scaffold he spoke these words, the sincerity of which cannot be doubted : “For the people truly I desire their liberty and freedom as much as anybody whatsoever ; but I must tell you that their liberty and freedom consists in having government ; ……it is not in their having a share in the government ; that is nothing pertaining to them. ” (P472)

(2) Louis16世の処刑

Louis16世はLouis14世, Louis15世の様に多数の寵姫を宮廷内にはべらせることもなく, 皇妃Marie Antoinetteのみを愛し極く普通の父親であった。彼はdanceをするでもなく, 大酒を飲むでもなく精々狩獵位が趣味であった。もしフランスの一市井人に生まれていたら平凡な一生を送り得たであろう好人物であった。彼が死を平然とむかえることができたのも, 生来の鈍感という素質と無関係でなかったかもしれない。処刑の前夜Louis16世は深い眠の中にあったという。処刑に出る前従者に結婚指輪を託し「これを妻に返してくれ, そして別れるのがつらいと伝えてくれ」と言った。又処刑直前には, 「国民よ私は罪なくし死ぬのだ, 諸君, 私は非難される理由はない。私の血がフランス人の固めになることを切望する」と。ギロチンの刃は一撃にして王の頭と胴体を切り離す。「共和国万才」という叫びがいくつか聞かれた。声はしだいにふえてゆき10分もたたないうちに, この叫び声は群衆全員の叫びとなり, みんなの帽子が宙に舞った。

As his head fell beneath the knife of guillotine, a great shout, "Vive la République!" burst from the surrounding multitudes, and echoed through the empty halls of the neighboring palace of the Tuileries. (Mediaeval and Modern History by Myers P524)

(3) Nicholas II の処刑

1917年5月15日 第一次世界大戦の西部戦線が膠着状態にあった時, ロシアは突然国内の革命によって東部戦線を離脱してしまった。1917年4月6日アメリカの連合軍への参戦の日であるからその直後であった。かくて300年以上に亘ってロシアに君臨したロマノフ王朝は倒れた。革命については色々な原因があるが, Myersは次の様に述べる。

The immediate cause of the revolution, aside from the widespread suffering of the people and general war-weariness, was the incompetence shown by the government in the conduct of the war, and

the popular belief, which was well founded, that the defects which the Russian armies had suffered were the result of treachery on the part of Russian officials of pro-German sympathies. と。(P688)

この外に皇帝を取りまく宮廷内部にも予言者ラスプーチンという怪僧が皇妃の信頼を得、その上風紀上の問題までも起こして素乱しきっていた。要するにロシアは内部より崩壊したのである。皇帝Nicholas II及び家族の惨殺は極秘裡に行われ、極く最近まではその真相が不明であった。しかしここ10年来の調査ではウラル地方スベルドロフスク市の沼地で、Nicholas IIと皇后、皇太子、四人の皇女、侍医一人、侍女一人、従者二人の計11人が殺されたことは確実であるという。皇帝は1918年7月16日銃殺、残り10人は別の場所に移されどの様にして殺害されたかは不明であるが、遺体を溶かす時に硫酸が使用されたい。彼等が使っていたearringやボタン、ガラス瓶、飼い犬の死体が発見されたので、殺害された場所だけは確かの様である。ロマノフ王朝の最後こそ凄惨の極みに盡きる。Myersはただ次の如く述べているだけではあるが。

After his abdication the ex-Tsar Nicholas II became a prisoner of the Russian revolutionary government. He was finally taken to Siberia, where he and his wife and children were murdered by the Bolsheviks, who had seized supreme power. (P689)

8. Guillotine

フランス革命と言えば、自由、平等、博愛の標語の下に、政治的、社会的な大変動を想像すると同時に、あのいまわしい恐怖政治の下にguillotineの犠牲になった多数の人々の事を想起し、特に美しい王妃Marie Antoinetteの死刑は後世多くの紅涙をながさせ、革命否定思想の情緒的基盤となっている。しかしMyersはフランス革命のIntroductoryに次の様に述べる。

The Revolution was a revolt of the French people against royal despotism and class privilege. "Liberty, Equality, and Fraternity"

was the motto of the Revolution. In the name of these principles great crimes were indeed committed, but these excesses of the Revolution are not to be confounded with its true spirit and aims. The French people in 1789 contended for substantially the same principles that the English people defended in 1642 and 1688, and that the American colonists maintained in 1776. It is only as we view them in this light that we can feel a sympathetic interest in the men and the events of this tumultuous period of French history

(P512)

恐怖政治はどう考えてもDemocracyに背反するものであり、独断専制の何ものでもない。なるほど歴史は必ずしもいつも同じ速度で進むものではなく、水の流れがせきとめられるときは、それは瀑布となって一瞬にほとぼしることはある。革命は短時間に旧社会の矛盾を解消して新しい社会をつくり出す有効な方法である。Myersが述べる如くフランス革命の本質と恐怖政治の行き過ぎとを混同してはならないと思う。

次に我々は1789年7月14日のStorming of Bastille後日遠からずして国王の処刑と思い勝ちであるが、いかに専制主義が支配し幾多の悪政を重ね、その生活の奢侈が国庫の余裕を涸渇せしめたとはいえ、Burbon王朝を敬慕する大衆の気持ちは、容易に払拭し得るものではない。アメリカの独立戦争に参加したLafayetteの如きは、飽くまでBurbon王朝を立て、ただ行き過ぎた行為や、国庫を無制限に濫費することをcheckする立憲王政を確立し、それによってすべてを解決すべく努力しようとしたgroupもあったのである。しかしLouis16世が当時盛り上った国民議会を抑圧しようとしたり、国外に逃亡を企てヴァレヌヌでとられるという事件がおこり、国民は完全に国王を見放してしまった。そして革命勃発（1789, 7, 14）より3年半にして、処刑される憂目におちいるのである。

Louis16世の死刑の賛成387, 反対334で満場一致でLouis16世の処刑がきまっ

たわけではない。国王は一般人民にとっては空気の様なものである。その有罪には一応賛成したもののこれを抹殺することはどこか不安があったのではないか。

次に何といってもguillotine犠牲者中の白眉は夫の処刑後9ヶ月後に、断頭台の露と消えたMarie Antoinetteであろう。彼女はオーストリア皇帝の妹、女傑Maria Theresaの娘で、14才の時フランス・オーストリアの和解の為、将来フランス王の妃となるべく、オーストリアからフランスに來た。全くの世間知らずのお姫様、フランス宮廷の儀式ばった生活に飽きてVersailles宮殿内に羊を飼ってみたり、こっそり宮殿をぬけ出してパリーでダンスに興じたり、午後四時前に眼をさますことを知らぬだらしない生活をしていた。彼女の処刑については同じMyersの著書であるが“Medieval and Modern History”のP528に次の様な傷ましい描写がある。

One of the earliest victims of the guillotine under the organized Terror was the queen. The attention of the Revolutionists had been turned anew to the remaining member of the royal family by reason of the recognition by the allies of the Dauphin (注) as King of France, and by the recent alarming successes of their armies. The queen, who had now borne nine months imprisonment, was brought before the terrible Revolutionary Tribunal and condemned to the guillotine. She was conveyed in a common cart to the same spot where, less than a year before, her husband had suffered.

When she first appeared in the chamber of the dread tribunal, with her robes disordered, her air blanched from anguish, and her face furrowed with sorrow, — so changed from that fair vision of beauty once the center of the brilliant court of Versailles — a wave of pity had rushed over the hearts of all beholders ; but the rising tide of sentiment had been checked, and now a hideous mob of men and women howled with savage delight around the cart which bore

the unhappy queen to the scaffold.

We need not speak of the faults of Marie Antoinette, though they were many ; her patience, her heroism and her sufferings were ample atonement for them all. (Medieval and Modern History by Myers. P528)

〔注〕 Dauphine. Marie Autoinetteの男子で将来Louis17世となるべき人であった。普通の歴史教科書ではLouis16世から、Louis18世に飛んでいるのはその為めである。僅か8才にすぎなかったが、1793年1月のルイ16世の処刑後は欧州諸国によってフランス国王として認められていた。母親と共に牢獄にあったが、獄吏の苛酷な待遇によって1795年に獄死した。

古来国王や君主に殉じてその王妃も後に続くことは多かったが、時として女性なるが故に死を免れたり、敵に身を委ねて生きのびる例もなきにしもあらずである。しかしMarie Antoinetteの場合は夫も子供も最悪の事態になり、自らも「オーストリアの女め」という罵声をパリーの賤女達から死ぬ間際まで受けこれほど悲惨な運命を辿る女性は珍しい。さすがにMyersはMarie Antoinetteの欠点は多くあったろうが、her patience, her heroismそして her sufferingは当にそれら欠点を充分に贖罪していると結んでいるのは見事という外はない。

女王の処刑後2週間後にはジロンド党の主だった者202名その後数百人の者がguillotineの犠牲となった。Myersはそれを無生物主語を以て次の様なすざましい描写をしている。

The guillotine was now fed daily with the best blood of France.
と (P532)

ジロンド党員である嫌疑で処刑台に登ったMadame Rolandについては

As she was about to lay her head beneath the knife, her eye, it is said, chanced to fall upon the statue of Liberty which stood near the scaffold. "O Liberty !" she exclaimed ; "What crimes are c-

ommitted in thy name!”と。(P532)

「剣によって立つ者は剣によって滅ぶ」「guillotineによって敵を制した者はguillotineによって成敗される」革命家達の末路は概ね悲惨である。「テニスコートの誓」の集会を牛耳ったMirabeauは、1791年4月病死したが、死後Louis16世とひそかに闇取引をして過度の民主化を阻止していた事が発覚し、墓より遺骨が引きずり出されて、ごみの中に捨てられた。それでも革命家の中で自然死をした唯一の人物というべきであろう。尤もラアファイエット、シェース、タレイラン夫々時代の流れにそって浮沈はあったが、穏健な立憲王政を標榜していただけに、過激派の末路を辿ることは免れた。ジャコバン派の巨頭マラーはジロンド派のシャルロット、コルデという25才の女性に入浴中にナイフで一刺しで殺害された。ジロンド派の巨頭Danton (1759~1794) はジャコバン派のRobespierreによって断頭台に送られた。Dantonの死刑執行人に対する最後の言葉は

Show my head to the people ; they do not see the like every dayであった。そしてThe grim request was grantedとある (P534)

まことに悚然として肌粟を生ぜしめる言葉ではないか。

Dantonは裁判所の書記を父としてシャンパーニュ州に生まれ、祖父の代まで農民で2才で父を失い母ひとりに育てられた。ジロンド党は第三階級といっても下層労働階級を除くbourgeoisieを背景とする党派で、一方 Robespierreのジャコバン党は無産労働階級をバックにもつ党派で、Robespierreの没後はBourgeoisieの勝利に帰し、フランス革命は結局Bourgeoisie乃至は富裕一般農民達の革命であったことになり、一旦彼等が特権を得ると再び王政に戻りたくもなく、さりとて無産一般大衆に権力を渡す意志もなく、安定を求めてNapoleonの軍事政権を頼ることになる。

それは扨ておき、パリー恐嚇政治の最高潮は Robespierre政権掌握後のthe Great Committee of Public Safetyの下に設けられた the Revolutionary Tribunalの迅速な裁判手続処置であった。

Rank or talent was an inextinguishable crime. “Were you not a noble?”

asked the president of the tribunal of one of the accused. "Yes , "
was the reply. "Enough; another!" was the judge's verdict. (P535)

以上の如く「お前は貴族であるか否か」という質問に対し「貴族である」と答えれば、それで「死刑」「次」という工合に杜撰極まる裁判が行われた。そしてその上もっともいまわしい事実がguillotineによる処刑現場には、パリーの賤女達がベンチを並べて見物席をこしらえ、編物をしながら席料をとっていたということである。

The scenes about the guillotine seem mirrored from the Inferno of Dante. Benches were arranged around the scaffold and rented to spectators, like seats in a theater. The market women of Paris, who were known as "the Furies of the Guillotine," busied themselves with their knitting while watching the changing scenes of the bloody spectacle. In the space of seven weeks (June10 — July27, 1794) the number of persons guillotined in Paris was thirteen hundred and seventy-six, — an average of over twenty-eight a day. (P535~P536)

しかしかかる残酷な光景が何時までも続く事は到底許されるところではない。遂にジャコバンの巨頭 Robespierre もsweep away されることになる。

ここで Robespierre (1758~1794) について少し語っておこう。彼の祖先は代々北フランスのアラスという地方都市に住み6代前からずっと法律家であった。彼の父は神経質な変り者で女出入りがたえず、ある娘の腹が大きくなってから大急ぎで結婚し、4ヶ月目に生まれたのがRobespierre であった。6つの時母を失い、10才の時父親が借金につまり放浪の旅に出てしまったという。家庭的に不遇であったのはDanton ともよく似ている。非常な秀才であり、勉強家でもあった。ルソーを耽読し高潔な人格とあいまって清廉の士としての評判が高かった。清貧に甘んじ34才で死んだのだが、家主には4,000フランの借金があった。そして一生不犯であった。本年1989年はフランス革命200年祭に当

り、フランスでは Robespierre を再評価しようという動きもあるのだが、何といっても恐怖政治の張本人として汚名はぬぐい難く、Danton, Robespierre の名を聞いただけでフランス人の血は騒ぐという。

Robespierre の最後も亦凄惨そのものである。テルミドールの反乱で、彼は19才の少年にピストルで顎をうちくだかれた。彼はそれを包帯でしばりつけたまゝ、コンコルドの広場へとこぼれた。上着はやぶれ血まみれのシャツの下から蒼白い胸をのぞかせ、純白の靴下は血にまみれていた。刑吏の手さきが群衆の叫びに助けられRobespierre の顎の包帯をひきちぎる。うめき声、蒼ざめた見苦しく大きくひらいた口、そして折れて今にも落ちそうな歯。そしてギロチンの刃は瞬間に下る。

Robespierre は革命の殉教者といわれる説がある。その理由はこうである。フランス革命全体をつらぬいて実現されるべきものはBourgeoisie の権力の確立であった。だがこれを達成するにはブルジョア独自では充分でなかった。小ブルジョアジーの協力が必要であった。しかし小ブル的権力そのものを維持することは、この歴史の段階では不可能であった。小ブル的「独裁」は革命の防衛というおのれにあたえられた課題の解決に成功した瞬間から、非情な歴史の女神によって没落の運命をあたえられていたのである。フランス革命にかぎらず、革命というDrama においては「狡兎死して走狗烹らる」という事は珍しくない。「あらゆる革命には、それを実行した人とそれでもうける人がいる」といったのは Napoleon であるが、Robespierreはまさに革命を実行し、外国軍の侵入から共和国を救ったのである。このことが彼が革命の殉教者といわれる所以なのであろう。

9. Decline of Napoleon

あれほど耳目を聳動したフランス革命が、共和制を実現したにもかかわらず、何故フランス人はナポレオンの帝制を受け入れたのか。それは革命の所産たる市民階級および土地所有農民達が新たに得た所有を固めるために、旧制度の復

活にもまた革命の継続にも反対したからである。労働者階級の未成熟な当時においては、見捨てられた貧農や無産者達は、社会主義思想の萌芽を後世に残したまゝ、未発のうちに鎮圧されてしまった。フランス革命はその意味において完全な民主主義の実現の段階には至っていなかったのである。ブルジョワと農民は、ジャコバンの亡霊と旧制度の復活との脅威におびえながら、不安定な自己の財産を守るためなんらかの強力な腕に身を委ねようとした。かれらの求める力はたゞ軍隊としてその指導者ナポレオン・ボナパルトのうちに見出したのである。

ナポレオンによってフランス社会のブルジョワ的安定は実現した。そして大陸諸国の征服によって広大な市場を与えられた。幼弱なフランス資本主義はその発展の基礎を固めた。ナポレオン法典は農民解放、私的所有権の絶対、契約の自由とを軸として近代市民社会の基本的諸関係を法的に確立した。

ところが「革命の子」であるべきナポレオンは革命の樹立した市民的民主主義の政治原理を無視して軍事的独裁を布き、共和制を倒して皇帝になった。この矛盾はナポレオンの強力に頼らざるをえない当時のフランス・ブルジョワジーの幼弱性と、土地所有農民の急速な保守化とに由来している。そして当時勃興しはじめたナショナリズムが、革命を防衛する戦争が国家的利益を求める侵略戦争に変質し、その波によってナポレオンは次々と成功を納め、国民の信頼を勝ち得るに至ったのである。物質的、領土的利害が革命の原理に優越することによって、フランス国民はナポレオンの帝政を認めるに至ったのである。かくて France was still called a republic, but it was such a republic as Rome was under Augustus. The republican names and forms merely veiled a government as absolute and personal as that of Louis XIV, — in a word, a military dictatorship. (P543) となったのである。

1804年ナポレオンは皇帝の位につき、英国との対立、大陸封鎖勵行に対するイスパニヤ国民の反乱と難題は続出していたが、とにかく1808年～1812年頃がナポレオンの権勢の絶頂にあった。彼が皇后 Josephine を離婚してオースト

リアの皇女 Marie Louise を皇后として迎へたのは1810年のことである。欧州の王室中の名家ハプブルグ家との縁を結ぶことを望んだからである。この事の事について Myers は次の如く述べる。

Soon after his triumph over the Emperor Francis, Napoleon divorced his wife Josephine in order to form a new alliance with the Archduchess Marie Louise of Austria. Josephine bowed meekly to the will of her lord and went into sorrowful exile from his palace. Napoleon's object in this matter was to cover the reproach of his plebeian birth by an alliance with one of the ancient families of Europe, and to secure the perpetuity of his government by leaving an heir to be the inheritor of his throne and fortunes.

The ambition of Napoleon to found a dynasty seemed realized when, the year following his marriage with the archduchess, a son was born to them, who was given the title of King of Rome. His enemies could now no longer, as he reproached them with doing, make appointments at his grave. He had now something more than "a life interest" in France. The succession was assured. (P554)

さてこの文だけを見ると長年連れそった糟糠の妻を見捨て、名門のお姫様と結婚するなどというのは、ナポレオンも随分ひどい男だと思われるのであるが、少しく附言する必要がある様に思う。

ナポレオンはヴァンデミュールの王党派反乱を鎮圧した直後1796年3月6才年上の Josephine と結婚した。彼女は共和主義の將軍そして恐怖政治のもとでギロチンの犠牲となったボーアルネ子爵の末亡人で二人の子持ちの美貌婦人で当時33才であった。既に他の男性の愛人でもあったのだが、ナポレオンは意に介しなかった。ナポレオンの留守中も兎角の噂のあった女性である。離婚に際しては依然として皇后の名を許し、彼女の先夫の二人の子供にも、後のイタリア副王、オランダ王妃にしており、それ相当の気配りと待遇を与えていた

らしい。このオランダ王妃オルタンスとナポレオン実弟のルイとの間に生まれた子がやがて後世ナポレオンⅢとなるのである。

一方再婚の相手 Maris Louise はあのギロチンの犠牲になった Marie Antoinette の姪に当たる平凡な18才の娘、容貌も十人並で美人というほどでもない。鈍感で移り気、投げやりなところがあり、ナポレオンが Moscowで大敗してから夫ナポレオンに会うともせず、オーストリアから執事として送られたナイベルグ伯爵の情人となり数人の子を生みナポレオン死後彼と結婚した。一方先妻であった Josephine もナポレオンが Elba 島に流されて間もなく死亡した。

ナポレオンは確かに一世を風靡した英雄である。数学と歴史を得意とする彼は、軍略にもすぐれており、身体も tough であった。すべての場合に運の強さに恵まれていることは確かだが彼自身も非常な努力家であり勤勉家であった。数時間の眠りで疲労を回復できる超人である。彼の強運と末路の哀れさはわが国の豊巨秀吉に類似している。ところで一旦人間も落目になれば、すべてが敵となるものである。

Even the large class who at first welcomed Napoleon as the representative of the French ideas of equality and liberty, and applauded while he overturned ancient thrones and stripped of their privileges ancient aristocracies, — even many of these early adherents had been turned into bitter enemies by his adoption of imperial manners and the formation of a court, and especially by his setting aside his first wife, Josephine, and forming a marriage alliance with one of the old hated royal houses of Europe. (P556)

ナポレオンの没落は1812年の Russia 侵入から始る。5日間に亘るモスコーの大火の上に更に冬將軍の訪れにたまりかねてナポレオンは退去を開始した。そして出発前の45万の大軍が僅か3万という数字になり、やっとの思いでフランスに帰ってきた。トルストイの大著「戦争と平和」の最終巻には悲惨なフランス軍の退去の有様をあますところなく伝えている。トルストイはフランスと

敵対関係にあったロシアの文豪であるせいもあり、ナポレオン評は厳しい。「侵略した国の財宝金銭その他を奪い自国民の利益を図るナポレオンにどれほど英雄的価値があるのか。偶然という名の幸運によって或る程度までの勝利をおさめただけではないか」と。

スタンダールは「革命の子たることをやめて、普通の君主でしかないことを望み、国民の支持を失ったために、ヨーロッパの最も輝かしい家族ハプスブルグ家の支持を確保せんとした」と。

もっともタレイランの如く憂める人もいる「彼の天才は信じがたいほどのものであった。ここ1000年のあいだに見られた最も驚くべき生涯である。彼はたしかに私がかつて見た最も異常な人間であった」と。

なるほど彼は肉体健全、どこでも好きなときに好きなほど眠ることができ、小粗食に堪え、晩年は別として疲れというものを知らなかったという。

扨て Myers のナポレオン評は Tocqueville の評を引用して結んでいる。

As a military genius and commander he left a deeper impress upon the imagination of the world and fills a large place in history, probably, than any other man who ever lived. " He was as great as a man can be without virtue" (Tocqueville). (P564)

10. Lafayette, we are here.

1914年8月4日第一次世界大戦の幕は切って落された。そして東西両面に敵を受けたドイツは一刻も速くフランスを圧服すべく、国際法に違反してベルギー領を通過した。そして戦時中にはあり勝ちな身勝手な次の様な宣言をした。

The crime was confessed in self-indicting words by German Chancellor, Bethmann-Hollweg. In announcing to the Reichstag the invasion of Belgium, he said: "Gentlemen, we are now in a state of necessity, and necessity knows no law. Our troop have occupied Luxemburg and perhaps are already on Belgian soil. Gentlemen, that is contrary

to the dictates of international law……The wrong—I speak openly—that we are committing we will endeavor to make good as soon as our military goal has been reached.” (P677)

国際法に Law of Necessity という法理はあるが、上述の論述はまことに身勝手な法理の使用という外はない。しかし当時のベルギー人の抵抗には、ドイツ軍も手こずったらしい。ドイツ皇帝 William II がベルギー王 Albert に対し、ドイツ軍がベルギーを制圧したとき So you see — you’ve lost every thing と言ったのに対し Albert 王は not my soul とやりかえしたというエピソードがある。

だが東西の両戦線は塹壕戦となり完全に膠着してしまった。そして膠着を打開せんがためドイツ軍はベルダン総攻撃を開始したが、仏軍も亦 They shall not pass の意気込みで頑張った。当時ドイツも戦局を何とか打開すべく Unrestricted Submarine Operations を開始し、中立国の船や戦争に関係のない船まで沈めた。これがアメリカの憤激するところとなり、アメリカをして欧州における大戦に参加せしめることになる。事実アメリカの参戦がなければ勝敗はいづれにあるともいえない状態であったので、アメリカ参戦の news は連合軍を有頂天にしたのも無理からぬところであった。

On receipt of the news in England the Stars and Stripes were flung out alongside the Union Jack of Great Britain from the high tower of the Parliament Building at Westminster — “the first time”, it is said, “that a foreign flag was ever displayed from that eminence”.
(P690)

数週間後、米軍の最初の遠征部隊が Pershing 将軍の指揮の下にフランスに上陸した時、フランス人の感激ぶりは半狂乱 (frantic) であったという。そして将軍が Lafayette の墓に詣でて Lafayette, we are here! と劇的な言葉をはいたのはこの時であった。

A fitting memorial of this historic hour are the simple words

uttered by General Pershing at the tomb of Lafayette . Saluting, he said, Lafayette, nous voilà ! (“Lafayette, we are here”), thus compressing into a happy epigram “the story of an historic obligation and its proud discharge”. (P691)

Lafayette (1757~1834) はフランスの自由主義貴族で1777~81年義勇兵として、アメリカ独立軍に参加した。もっとも彼の父は彼が2歳の時7年戦争で戦死し、彼の反英感情が義勇軍参加を決意せしめたものといえる。戦後フランスに帰国した後も、彼の部屋には、アメリカの独立宣言書が掲げられていたという。因に独立宣言書は Thomas Jefferson の作成したものであり1776年7月4日 Congress によって可決されたものである。宣言の中心たる主要部を述べれば

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness.

又 Lafayette はフランス革命の時も終始立憲君主主義の立場を取り、ブルボン王朝を認めつつも君主による専制や国費の濫費を法によって checkする政治体制を求めていたのである。革命の激化を嫌って1792年8月オーストリアに亡命し、ナポレオン没落後に帰国し、7月革命に活躍し guillotine の犠牲になることも免れて晩節を全うした。

Lafayetteに関する今一つのepisodeをそえる。フランス革命は先述の如く1789年7月14日 Storming of Bastille によって始ったのだが、牢獄の鍵が Lafayetteによって Washingtonに送られているのである。

The key of the dungeon was sent by Lafayette to Washington “as a trophy of the spoils of despotism.” In a letter accompanying the gift, Lafayette wrote: “That the principles of America opened the Bastille is not to be doubted, and therefore the key goes to the

right place.” (P522)

そしてその Key は今日でも Mount Vernon の case の中に納められているという。Lafayette と言い、Pershing 将軍と言い、まことに味のある performance をするものだと思ふ。

11. War Criminal

東京裁判において被告東条英機は最後の陳述で This is the victor's trial という言葉を残して絞首刑場の露と消えた。事実今日に於ては東京裁判及びニュールンベルグ裁判の意義については、正しい裁判であったかどうかの論争がやかましい。先ず第一に戦勝国のみが裁判官となり、敗戦国の責任者を被告として裁判をするのは「勝者は正義」という前提があり公平を欠く。少くとも中立国の裁判官をメンバーに入れるべきであった。第二に平和に対する罪が絞首刑になるという国際法国際慣習法が当時確立していたか。従って東京裁判は法理上の罪刑法定主義に違背する。第三に日本が侵略戦争を行ったという起訴事実も、経済封鎖をされて挑発されたという反駁論、自衛戦争との定義づけの曖昧さと相俟って問題が残るところである。しかし南京における日本軍の虐殺事件その他戦争法規違反の非も率直に認めねばなるまい。ところで東京裁判の辯護人の一人清瀬一郎をして「東京裁判は土人の首狩りと同じだ」と言わしめたのも無理からぬところである。また裁判官の中でも印度のパール判事が唯一人「全員無罪」を主張したことも東京裁判中の白眉であったというべきであろう。全員無罪ということは、当時の日本国民感情や、戦勝国側の復讐心から言っても無理かも知れぬが、死一等を減じ、永久隔離つまり無期懲役にしておいて、講和条約後或いはもっと後世になって、世の中が平静をとり戻した頃釈放したならば、東京裁判の意義も亦異った評価がされたかも知れない。当時の裁判者側、特に、ソ連、中国、オランダ等では天皇を戦争犯罪人とすべきだという強硬な主張があった。明治憲法下にあつては、天皇は陸海軍を統率する大権を有していたから、権限のある所に責任があるという法理の下にその様な主張がな

されたのである。最近長崎市長が「天皇にも戦争の責任がある」と発言して物議をかもしたことは事新しいところである。連合軍総司令官マッカーサーは、天皇を戦争犯罪人として裁判にかけると占領政策がスムーズにゆかないことを察知して、GHQよりも上位にあった対日理事会が天皇を戦争犯罪人とすることを強行する前に、日本国憲法を作成して天皇を日本国の象徴とすることによってその危難を免れしめたのである。新憲法は占領軍による押しつけ憲法であるという前に先ずその様な裏面史があったことを銘記すべきである。

扨て第1次世界大戦後の War Criminal の問題はどうかであったか。やはり戦争を始めた張本人ドイツ皇帝 William II や当時のドイツ首脳部その他の戦争犯罪人に対する裁判や処罰の問題がおこり講和条約であるヴェルサイユ条約で規定が設けられた。

In respect to responsibility for the war a special article of the treaty arraigned the Kaiser in these words: "The allied and associated powers publicly arraign William II of Hohenzollern, formerly German Emperor, for a supreme offense against international morality and the sanctity of treaties". His surrender was to be requested of the Netherlands for trial before an international tribunal. All other persons who had violated the laws of war were to be given up by Germany for trial and punishment. (P708)

と Myers は述べる。第一次世界大戦では、第二次世界大戦の時と違って、国際連盟（1919年6月成立）がある訳でもなく、不戦条約（1928年8月）の成立もずっと後のことであるし、精々ハーグ陸戦法規（1907年10月）位が存立していたに過ぎず、戦争犯罪人として国家の責任者を処罰するという状況までには至っていなかったのであろう。なるほどヴェルサイユ条約第228～230条では、戦勝国が戦敗国の戦争犯罪人を処罰するため、引渡すべきことを規定し、戦勝国の裁判所で処罰する旨の規定を置いている。しかし実際は次に述べる様な事で裁判や処罰は行われなかったが、第二次世界大戦後に行われたニュールンベ

ルグ裁判や東京裁判の萌芽があったというべきであろう。

連合軍はオランダに亡命していた William II の引き渡しを要求したが、オランダは政治的犯人不引渡の原則という国際法上の原理を盾にとって、この要求に応じなかった。

By note dated January 15, 1920, the Supreme Council of the Peace Conference demanded of the Netherlands government the extradition of the former Emperor William. The demand was refused. (P708)

又、首相ベートマン・ホルウェッヒ、ヒンデンプルク元帥、ルーデンドルフ大将その他の要人達を連合軍に引渡す様要求したが、ドイツ国内で非常な反対がおこり、結局、第二次世界大戦後の戦勝国による大体的な裁判は行われず、戦争犯罪人の裁判処罰は敗戦国ドイツ自身の手によって行われたことも特筆すべき事柄であった。約900名ばかりの被疑者をドイツ国内の裁判で審理することになったが有罪の判決は僅か6件、もっとも重いもので4年の禁錮であった。第二次世界大戦後の東京裁判、ニュルンベルグ裁判と比較して転た隔世の感を深くするのである。

終わりに

Myers は General History の最後のくだりで第一次大戦後に関する若干の感想を述べている。

第一点は、ロシア革命の成功が表面上のことで、経済的發展の過程で stand-still か breakdown が訪れるであろうことを指摘し、(P721) 第二に、第一次大戦末期にあらわれた航空機に関し、contribute largely to the growing union and progress of the nations を予想すると同時に through its misuse in a new world it may set back human progress for centuries or conceivably wreck civilization (P727) と指摘した。

第三に 国際連盟の出現は outlawry of war を実現せしめるであろうことを高く評価し、“Here we have”. writes an eminent authority, “one of

the most vital texts in the world's history, a document which, whether finally deceived or rejected, is destined to mark an epoch in the history of politics and in the moral outlook of the world". (p727) と力強く文章を結んでいる。不幸にしてヴェルサイユ体制の欠陥や不満から、国際連盟成立十数年後に、その組織は形骸化し我々は第一次大戦をはるかに上回る規模の第二次世界大戦の惨禍を経験した。Myersをして今日あらしめば、果して彼はどの様な論評を下したであろうか。

終りにMyersのGeneral Historyと私との出会いについて簡単に述べてみる。私が旧制高校3年の時、日本史の教授に久保田収^{おさむ}という先生がおられた。彦根の御出身で私より10才上であったから当時はまだ30才位であったろうと思う。先生はあの有名な平泉澄先生の高弟で、日本歴史の講義も、大化の改新、建武の中興、明治維新に終始し、今日から見れば先生の皇国史観はいただけないところであるが、人格的にも学問的にも尊敬に値する立派な方であった。その久保田収先生がMyersのGeneral Historyの読書を我々学生に奨められた。昭和14年頃の事である。(Myersは昭和12年に他界していたのであるが。)翌年5月頃神田の古本屋でこの本を見つけ、当時の金で三円位で買ったことを覚えている。ルネッサンス以降を拾い読みしたのであるが、当時の私の語学力では、辞書をひきひきたどたどしく読むのが精一杯で、こんなに素晴らしい本であることを鑑賞するだけの余裕がなかった。その後何時か読もうと思いながら、引越しの度に多くの書籍の中にまぎれこんでいるのは知っていたが、昭和63年英国の選挙制度のことについて調べる必要上読み始めたところ、やはり久保田収先生推薦の書だけあって、その内容といい英文の表現といい名著であることを改めて知り、最初から読みなおして本篇の読後雑考と相成った次第である。

終戦後久保田先生は皇国史観の立場上学校を退かれて京都に移転され、京都新聞の論説委員や高野山大学の時間講師として糊口をしのいでおられたが、その後皇学館大学国史学科主任教授としてやっと落着かれた様であった。しかしその後間もなく昭和51年12月7日66才で他界された。昭和36年私が京都大学法

学部大学院で国際法の研修をしていた頃不図20年振りにお会いする機会にめぐまれ、二人で北朝最初の光厳天皇の御陵のある山国大雄山常照皇寺に参詣したことは、今となっては懐かしい思い出となった。ここに先生推薦の書 Myers のGeneral Historyをやっと読了したことを御報告すると同時に、先生の御冥福を心よりお祈りするものである。